

「非正規滞在」の子どもに出会ったら。 日本人の先生に知ってほしいこと。

ホセは、藤沢で生まれた。

お父さんは塗装工場で夜遅くまで働いている。無口だけれど、とてもやさしい。

「横浜ベイブリッジのペンキは、お父さんが塗ったんだよ。」それがお父さんの自慢だった。

お母さんはお弁当屋さんでパートをしている。家は豊かではなかったけれど、お母さんはいつも元気で明るい。このごろはホセの学校で、PTAの役員まで引き受けている。



ホセは、赤ちゃんの頃からまわりの友だちと一緒に育ってきた。湘南台や境川はホセたちのお馴染みの遊び場だ。

でも小学校にあがる頃から、ホセはなんだか「自分がまわりと違う」ことに気づき始めた。名前や顔立ち、

そして自分が「ガイジン」といわれること。

でも担任のノグチ先生は、ホセが「ガイジン」とからかわれると、「どうしてそんなことを言うんだ！みんな仲間なんだぞ！」とホセをかばってくれた。

いじめられることもあった。でも、仲の良い友だちもいた。ホセは、やっぱり学校が大好きだった。

お父さんが捕まった！

ある日ホセが学校から帰ってくると、家の様子がおかしい。いつも元気なお母さんが、中学生のお姉ちゃんと暗い顔をしてひそひそ話している。

「ニューカンが」「コクガイタイキョ」

「どうしたの？」とホセが心配そうに聞くと、お母さんは「心配しなくていいの！」というだけだった。

でもお母さんの「心配しなくていい」はウソだった。ある晩、お母さんはホセとお姉ちゃんを呼んだ。

「お父さんはね、いまニューカン（入国管理局）というところにつかまっているの」

「お父さん、何か悪いことしたの」ホセが泣きそうになって聞くと、お母さんは強く首をふった。

「お父さんは、何も悪い事なんかしてないよ。毎日、一生懸命まじめに働いてきたことは、ホセも知ってい

るでしょう」

「じゃあ、なんでつかまっちゃったの」

「お父さんは『オーバーステイ』って言って、本当は、私たちは日本から帰らなくてはいけないの」

「どうして！」お姉ちゃんが、急に怒り出した。

「お父さん、泥棒をしたわけじゃないし、日本でずっと働いてきただけでしょう！

日本の若い人たちが3Kの仕事嫌がるから、お父さんたちが働くんじゃない。会社の社長さんだって、お父さんたちがいなくなったら困るでしょう！

お父さんもいけないかもしれないけど、日本だってずるいよ！」

お母さんは、黙ってじっとテーブルを見つめていた。やがてホセたちに、「ニューカン」から連絡が来た。どうも一家は「国外退去」になりそうだという。

ホセは泣いた。生まれ育った藤沢や、学校や、友だちと離れなければならない。

ホセは日本語しか話せないのに、まだ見たこともない国に行かなければならない。そこは「おばあちゃんの国」だというけれど、ホセには「外国」だった。

お母さんが学校に電話をした。ノグチ先生は電話の向こうで「えっ」と言ったきり、絶句していた。

先生だって、自分のクラスの子がいきなり「不法滞在」で「国外退去」なんて言われたら、どうしていいかわからなかったはずだ。

職員室で同僚に相談してみたら、返ってきたのはこんな言葉だった。

「『不法滞在』？ ノグチ先生、学校がそんなことにかかわっちゃいけないんじゃないの？」

そう言われてしまうと、ノグチ先生は言葉に詰まった。ホセの悲しそうな顔が浮かんだ

「非正規滞在」って、なに？

1980年ころから、日本にはおおぜいの外国人が増えた。

その理由はいろいろある。でも、多くはまだ貧しい国から仕事を求めてやってきた人たちだ。

一方、日本の中小企業や農家も人手不足で困っていた。日本の若者が“3K”の仕事を嫌ったからだ。

だから、安い賃金で3K労働もいとわないガイジンさんたちは、中小企業や農家の救世主だった。

でも、困った問題があった。日本はホセのお父さんのような単純労働を目的とする外国人の入国を認めていなかったのだ。

働きたい、貧しい国の人たち。

人手がほしい、日本の中小企業や農家。

そこで、みんなが“裏技”を使った。「観光」などの短期滞在資格で日本にやってきて、こっそり仕事に就く。そして、滞在期限が切れてもそのまま働き（雇い）続ける。いわゆる「オーバーステイ」だ。

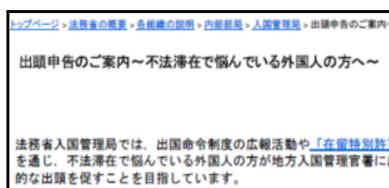
一時はこのオーバーステイなど「非正規滞在」の労働者は、22万人にもものぼった。

「不法滞在」という言い方もある（注）。でも、別に窃盗や密輸に来ているわけではない。

だから、不思議なことが起きた。非正規滞在者であっても、市役所に行けば外国人登録ができたのだ。子どもが生まれれば、学校に通うことも認められた。

出入国管理局のホームページには、「不法滞在の方へ」なんていうコーナーまである。

強盗に警察庁が「強盗の方へ」なんて呼びかけるだろうか？



つまり、非正規

滞在は「手続き違反」ではあっても、「犯罪行為」にはほど遠い、ということをおもなわかってるのだ。

しかし、そんな状態はいつまでも続かない。

日本は1990年頃から、ブラジルやペルーなどの日系人を受け入れ始めた。「研修生」という名目で、中国などから実質的な労働者もやってくるようになる。

ホセのお父さんたちと違って、この人たちは一応は「合法的に」働くことが認められていた。

すると、非正規滞在者は「ご用済み」になった。

“9・11”は、お払い箱の格好の口実だった。

「テロの防止」や「不法入国する外国人の取り締まり」を理由に、日本は非正規滞在者を厳しく取り締まる方針に転じた。さんざん安い賃金で3K労働をさせてきたことなど、省みようとしなかった。

そしてこの7月、日本は外国人政策の大転機を行った。「新たな在留管理制度」の導入だ。

これにはいろいろな問題がある。

特に、非正規滞在者は今後、外国人登録ができなくなる。つまり、この町で彼らが暮らしていることを証明するものがなくなってしまうのだ。

その存在は、住民票の上からは“消えて”しまう。医療などの住民サービスや、ホセたちのような子どもの教育は、どうなってしまうのだろう。

きっと政府は、非正規滞在の人たちに日本から出て行ってほしいのだ。でも、それでいいのだろうか

（注：国連の公式文書は「irregular（非正規）」を使う）

先生たちに知っておいてほしいこと

もし私たちがノグチ先生の立場だったら、どうすればいいのだろう。そもそも、非正規滞在の子どもに学校は「かかわってはいけない」のだろうか。

ぜひ、知っておいてほしい。文部科学省は、昨年12月に答弁書でこんな見解を出している。

我が国の公立の義務教育諸学校においては、在留資格の有無を問わず、就学を希望する外国人児童生徒を日本人児童生徒と同様に無償で受け入れることとしている。この方針は、御指摘の「新たな在留管理制度」の導入後も変わるものではなく、引き続き、外国人児童生徒の教育の充実に努めてまいりたい。（傍点は筆者）

つまり在留資格がどうであろうと、すべての子どもに教育を保障するのが学校の責務、ということだ。

ホセが学校に通うことに、何も問題はない。ノグチ先生がホセのためを考えるのも、当然のことだ。

「制度」と「現実」が矛盾しているなら、「制度」を現実に合わせるやり方だってある。

「まじめに働いてきた非正規滞在者」に合法的な在留資格を与えることは、「アムネ스티」と言って、欧米ではしばしば行われてきた政策だ。

本当は日本も「新たな在留管理制度」の導入に際して、一定の基準に合致する非正規滞在者には在留資格を与えてもよかったはずだ。（でも、政府はアムネスティを実施しようとはしなかった。「追い出し政策」と言われるのはこのためだ。）

ただ、個別には救済の道がある。日本でも法務大臣が認めれば、「特別在留許可」が与えられるのだ。

ホセの一家のように「日本の社会に定着しており、子どもが日本の学校に一定期間通学している」場合は、この特別在留許可に該当する可能性がある。

これを知ったノグチ先生たちは、PTAと一緒に法務大臣宛の嘆願署名を始めた。もしかしたら、ホセはこれからもみんなと学校に通えるかもしれないわずかな可能性に、ノグチ先生は賭けようと思う。

（この話はフィクションですが、藤沢でもわかっているだけで過去2件の児童・生徒の国外退去が起きています）